

「タイムスリップ」で歴史と遊ぼう

長野県 公立中学校教諭

「タイムスリップ」の魅力

帝国書院の教科書には、暗記物ではない歴史学習を促すための仕掛けが、さまざまに用意されている。「タイムスリップ」もその一つである。



歴史的な場面をこうしたイラストの形で描くというのは実は大変なことである。何が大変かといって、描くべき人、建物、動物、植物、景観等、すべてにわたって時代考証をすることは、非常に困難なことである。ことに、政治史ではなく生活史に関することの再現は難しい。しかし、そうした苦勞を経て描かれた見開きのイラストは本文の記述だけではとらえにくい時代のようすをイメージ豊かに再現し、伝えてくれる有効な資料である。

今回は「タイムスリップ中世①」を利用しながら、中世の農村に当時の農民や武士の姿を探りたい。そのなかで、それらがどんな根拠をもって描かれているのか、歴史像を描き出す源泉の史料にも目を向けてみたい。時代

考証という営みは、まさに歴史家の仕事なのであるが、これを疑似的にでも体験し、歴史を解明するという歴史学の営みの一端に生徒たちがふれられればと考える。

単純な問いから読みを深める

一年生の前半で学ぶ単元と考え、また歴史に興味のない生徒でも参加しやすい授業となるよう心がけた。また、これから学ぶ武士の時代のイメージをもたせるために、単元の初めに位置づけて考えた。「歴史と遊ぶ」ために大事にしたいのは、生徒の読み取りを促すための発問である。

ごく単純な発問を切り口に、徐々にイラストを見る目を深めていけるよう導くことが望ましい。今回は二つの単純な発問を入り口に、農民の生活と武士の生活をとらえていきたい。

発問1 このイラストに描かれた季節はいつですか。それはどこに描かれていますか。

秋、というのはおそらく無理なくたどり着く結論であろう。ではどこで秋を判断するか、





というさまざまな観点があり得る。

まずは農作業の風景が挙がるだろう。刈り取られた田んぼ、稲刈りをする農民、落ち穂拾いをする農民。鳥の食害から守るための鳴子や案山子。色づき始めた樹木の様子に気づく生徒もいるかもしれない。それだけではない。何か所かに描かれた年貢を納めに来た農民の姿に気づいた生徒がいたら、農民と領主の関係にふれ、教科書 p.56～57 の記述を参照するのもよい。



イラスト左上には鎮守の社が描かれ、幟旗が立てられている。これは収穫を感謝する秋祭りの準備である。ムラに鎮守の社がつくられるようになるのは鎌倉時代頃であることを伝えとよい。身近にあるものの歴史性にふれると、生徒が周囲を見る目が変わってくる。

近くに描かれた農民の住居のあたりに目をやると、収穫された米の俵が積まれ、粃を扱いたり米を搗く農民が見える。農民にも貧富があり、それがわらぶき屋根、板葺き屋根、堅穴住居など、家の造りの差としても表れていることがわかる。富裕な農民の家では鍛冶屋がなにやら作業している。農業に使う鋤や鎌などをつくっているかも知れない。

こうした多くの生徒の多様な気づきを位置づけることを大事にしたい。

発問 2 ここにはどんな動物が描かれていますか。一番多く描かれているのは何ですか。

多くの動物が描かれておりそれぞれに興味深い歴史をもっている。ここでは飼育されている動物で一番多く描かれている馬に注目させ、そこから武士の生活に目を向けていきたい。馬はもともと朝鮮半島から飼育法とともに伝来した。長野県は古代、多くの牧を持ち、そこで育てられた良馬が朝廷に献上された。役畜としての役割もあるが、鎌倉時代には馬の機動力が武士にとって重要であった。



イラストには弓を持ち馬に乗った武士や鞍のつけられた馬を手入れする武士が描かれている。武士の屋敷には厩があり、近くには魔よけの猿がつながれている。またイラストにはないが、馬場も設けられているだろう。

「武士の姿をもうすこし見つけてみよう」と促そう。塀の外、櫓やぐらの上、弓を引く武士など数多くの武士が描かれていることに気づくだろう。武士は土地の領主であり、武装して



領地を守ったという武士の起こりにふれておきたい。

多くの武士は武器として弓矢を扱っている。時代劇に登場する江戸時代の武士は二本差し(刀)のイメージであるが、鎌倉時代には馬を乗りこなし弓矢をたしなむこと、すなわち「弓馬の道」が武士の存在証明であった。そのため弓や矢の製作・手入れを怠らなかった。他の時代との比較も大切にしたい。

歴史史料と比べる

さて、すでに紐でつながれた猫や厩の側につながれる猿など、不思議に思ったことや疑問に思ったことが指摘されているはずである。ここで改めて挙げさせてもよい。



こうしたイラストの根拠はなんだろうか。何か史料があるのだろうか。紐でつながれた猫は『石山寺縁起』などに、厩の近くの猿は『一遍上人絵伝』などに描かれていることを示すとよい。なぜつながれているのか、生徒に質問するのもおもしろい。

そして次の活動を促そう。『粉河寺縁起絵巻』、『男衾三郎絵詞』、『一遍上人絵伝』などの絵画史料を教室に持ち込み、イラストが根拠としている史料を発見させるのである。いくつかのグループに分け、史料検討を分担させるとよい。それぞれのグループが発見したことを発表しあい、クラスで共有させよう。

むろん絵画史料だけでは時代考証はできな

い。さまざまな史料批判が行われてはじめて考証が可能となる。お伽草子に猫を紐でつなぐことについての記述がある。また、厩のそばにつながれる猿は馬の守り神とされたが、『独異志』などにこのことについての記述がある。このように一つひとつの場面がさまざまな史料批判を基に描かれていることを伝えたい。同時に、復元できないこと、つまり歴史にはまだまだ解明されていないことが多いのだということも伝えておきたい。

終わりに

二つの単純な発問から、考証されたイラストを読み解く試みを行ってきた。ただし、ここで挙げた二つの発問が最適ということではない。乱暴な言い方をすれば、教師しだいでどのような発問も可能である。「どんな音が聞こえてきますか」「どんな会話が交わされていますか」でも、中世の農村へ導くことはできる。その発問を導きとして、イラストを読み深める道筋を教師自身が持っていればよい。ただし、できればあまり固くない発問であることが望ましい。気楽に楽しく、自ら発見しながら歴史を学ぶ経験が、歴史嫌いをなくすために大切だと考える。

紙面の関係で導きの発問以外の問いかけは基本的には省略した。また、宗教の時代でもある中世の仏教に関する部分も省略したことを断っておく。

なお、教師の側がタイムスリップに描かれた場面の解釈を行う際、各種日本史事典の他に、『絵巻物による日本常民生活絵引』(平凡社)が参考になる。教室に持ち込める絵画資料としては『日本の絵巻』(中央公論社)などがある。